

Jendek, E. & Grebennikov, V., 2011. *Agrilus* (Coleoptera, Buprestidae) of East Asia. 362 pp., Jan Farkac, Prague.  
 福富宏和・堀 繁久, 2004. 北海道タマシ図説, jezoensis, (30): 1-25.

(森 正人 560-0883 豊中市岡町南 1-1-10  
 環境科学大阪株式会社)

### 【短報】ヨツボシテントウの幼虫をフナガマダラ オオアブラムシのコロニーから採集

ヨツボシテントウ *Phymatosternus lewisii* (Crotch, 1874) は比較的普通の種であるが、幼虫形態は正式には記載されていない。山本 (1982) はクリ園で発生する本種について観察を行い、幼虫は7~9月に見られ、クリオオアブラムシ *Lachnus tropicalis* (van der Goot, 1916), クワナケクダアブラムシ *Greenidea kuwanai* (Pergande, 1906), クリヒゲマダラアブラムシ *Tuberculatus kuricola* (Matsumura, 1917) の3種のアブラムシ類を捕食することを報告している。佐々治 (1998) は、1982年に福井県高浜町音海と三方町梅丈ヶ岳でクリやクヌギにつくクリオオアブラムシからヨツボシテントウの幼虫を採集したことを記録している。いっぽう、インターネット上では樹木に寄生する他のアブラムシ類 (クヌギミツアブラムシ *Kurisakia querciphila* Takahashi, 1960, コケクダアブラムシ *Eutrichosiphum pasaniae* (Okajima, 1908) など) を捕食している写真が掲載されており、ミカンクロアブラムシ *Toxoptera citricidus* (Kirkaldy, 1907) を食することも知られている (Kaneko, 2003, 2007)。

2011年12月9日、愛媛県松山市樽味の愛媛大学農学部構内に植栽されているモミジバフウに寄生するフナガマダラオオアブラムシ *Longistigma liquidambarus* (Takahashi, 1925) (以下、フナガマダラと略す) のコロニー内からヨツボシテントウの幼虫を1個体採集した。採集した幼虫をアブラムシのコロニーごと室内に持ち帰ったが、コロニー内を歩き回るだけでフナガマダラを捕食する様子は確認することは出来なかった。採集した数日後に蛹化し、2011年内に若干小さい成虫が羽化した。モミジバフウが他の樹木から離れた場所に植栽されていること、モミジバフウには他のアブラムシが寄生していないことから、ヨツボシテントウはフナガマダラを利用して成長した可能性が高いと考えられる。

フナガマダラは1990年に岡山県で初めて記録された外来種で (河田・山下, 1992), オオアブラムシ亜科の中でも大型のアブラムシである。フウナ

ガマダラは、晩秋から春季にはマンサク科のフウおよびモミジバフウを寄主としているが、春季から秋季にかけてはクロウメモドキ科のクマヤナギなどを寄主として利用する、寄主転換型の不完全生活環を営んでいると考えられている (高橋ら, 1994)。実際に愛媛大学農学部構内では11月中旬から5月初旬まではモミジバフウでの発生が見られたが、その後は確認できていない (安達・吉富, 2012)。フナガマダラの捕食者としては、ナナホシテントウ *Coccinella septempunctata* Linnaeus, 1758 (河田, 1992) およびヒラタアブ類3種 *Syrphus* spp. (中沢, 1992) の記録があるのみで、その特異な生活環を考慮すると、少なくともフウ類を寄主として利用している期間は昆虫類の捕食者が利用しにくい種であろうと考えられる。今回の報告は、ヨツボシテントウの幼虫が外来種であるフナガマダラを利用した点と、本種の幼虫の確認時期としてはかなり遅い点について特記されようと考えられる。

ところで、昆虫写真家の新開孝氏のブログ内でムラサキシジミの幼虫に乗るヨツボシテントウの幼虫が写真と共に紹介されており ([http://www.shinkai.info/himuka\\_blog/2009/07/post-220.html](http://www.shinkai.info/himuka_blog/2009/07/post-220.html)), アリのようにヨツボシテントウ幼虫もまた甘露を舂めとるのであろうかと推測されている。

フナガマダラは体サイズがかなり大きく、初齢幼虫でもヨツボシテントウの幼虫が捕食するには大きすぎると考えられる。そこで推測ではあるが、今回フナガマダラのコロニーから採集したヨツボシテントウの幼虫はアブラムシを捕食という形態ではなく、アブラムシが排出した甘露を利用した可能性もあると考えている。しかし山本 (1982) の観察もあることから、アブラムシの初齢幼虫については捕食した可能性も否定できない。

末筆ながら、本報告をまとめるにあたり様々な情報を提供頂いた山本栄治氏、新開孝氏、亀澤洋氏、および北野峻伸氏にお礼申し上げる。

### 引用文献

- 安達修平・吉富博之, 2012. 愛媛県のアブラムシ. 愛媛県総合科学博物館研究報告, (17): 29-47.  
 Kaneko, S., 2003. Impacts of two ants, *Lasius niger* and *Pristomyrmex pungens* (Hymenoptera: Formicidae), attending the brown citrus aphid, *Toxoptera citricidus* (Homoptera: Ahdidae), on the parasitism of the aphid by the primary parasitoid, *Lysiphlebus japonicus* (Hymenoptera: Aphididae), and its larval survival. Applied Entomology and Zoology, 38: 347-357.  
 Kaneko, S., 2007. Larvae of two ladybirds, *Phymatosternus lewisii* and *Scymnus posticalis* (Coleoptera: Coccinellidae), exploiting colonies of the brown citrus aphid *Toxoptera citricidus*

- (Homoptera: Aphididae) attended by the ant *Pristomyrmex pungens* (Hymenoptera: Formicidae). *Applied Entomology and Zoology*, 42: 181-187.
- 河田和雄, 1992. 岡山市周辺におけるフナガマダラオオアブラムシの発生. *中国昆虫*, (6):13-16.
- 河田和雄・山下 泉, 1992. フナガマダラオオアブラムシの日本からの発見. *日本応用動物昆虫学会誌*, 36: 247-251.
- 中沢啓一, 1992. 広島県におけるフナガマダラオオアブラムシの発生状況. *中国昆虫*, (6):17-22.
- 佐々治寛之, 1998. テントウムシの自然史. 251pp., 東京大学出版会.
- 高橋 滋・稲泉三丸・香川清彦, 1994. B301 フナガマダラオオアブラムシの生活環 (生活史・休眠・光周性). *日本応用動物昆虫学会大会講演要旨*, (38): 28.
- 山本栄治, 1982. ヨツボシテントウの食性に関する2,3の知見. *四国虫報*, (26): 148-150.

(吉富博之 愛媛大学ミュージアム)



「学名論—学名の研究とその作り方」

平嶋義宏著 2012年発行

定価3,200円 東海大学出版会

A5版, xiii+347 pp. ISBN978-4-486-01923-7

本書を手にして最初に印象的だったのは、それが実に軽快であることだった。著者の平嶋氏はすでに、氏の学名研究の集大成として、大冊の「生物学名辞典」(平嶋, 2007, 東京大学出版会, 東京, xxii+1292 pp.)を上梓している。この本はしかし、著者自身が最初のはしがきに書いている通り、一般の昆虫愛好者や初学者、学生が手に取るにはあまりに重厚で敷居の高いものである。本書はむしろ、これから学名を学ぼうとする、あるいは昆虫分類学に進もうとする意欲を持った初学者、学生にとっての最初のステップとして、入門書として最適である。

平嶋氏のこれまでの学名に関する本の中では、写真や図が示されていたものの、すべてモノクロだった。しかし本書では、所載の写真の多くがカラー印刷になっている。本書を読み進んでいくと、これらのカラー写真は実に、実際の生物を活写したものであり、学名の理解を手助けするように配されている。生物の色を巧みに表現した学名は数多い。それらの学名がいかにか巧みであるかは、これまで実際の生物を手に入れるか、その種のカラー写真を探し回らなければわからなかった。しかし本書では、少なくとも写真が出ている種では、即座に学名の意図するところを理解できるようになった。写真がカラーに



なったことは、見た目豪華で、読んでいて楽しいばかりでなく、その意義は非常に大きい。

甲虫研究者にとってうれしいのは、クワガタムシ、ハネカクシ、アリヅカムシその他甲虫の学名の解説が今回ふんだんに盛り込まれていることである。甲虫界では、あまりにも多くの種があり、日本産の多くの種に19世紀~20世紀初頭のヨーロッパ人があまりにも無難な命名をしている。その後の日本の研究者には、そのようなお決まりの命名では飽き足らない人たちが少なくないようで、一見難解な、凝った命名が少なからず見られるようだ。平嶋氏が本書によって、それを懇切に解説したことは甲虫界にとっては極めて有益なことといえる。

本書は全編を通じて、これから新たな学名を生み出そうとする昆虫分類学者の立場に立っており、言い換えれば、新種名をつける立場に寄り添って書かれたものである。これは将来、そのような立場に立つであろう初学者や学生を含めて、学名に使われている古典語の奥深さを再認識させ、その正しい使い方へ導く力が感じられる。学名を構成するラテン語は我々アジア人にはなじみの薄い言葉であり、初学者や学生の学ぶ機会が少ないことは仕方のないことだろう。しかしたとえ欧米人であっても、最近の若い研究者の間では、これらの言葉と学問の基本である古典語に対する知識と理解が希薄なことは大変残念なことである。本書がそのような風潮に一石を投じるものになることを願ってやまない。

(国立科学博物館動物研究部 野村周平)